第一章

第一章　プロローグ

目が覚めると、見知らぬ薄暗い街灯の下、冷たい風が吹き抜ける。

周囲を見回すと、見知らぬ町の風景が広がっていた。

隣の女性「ここは…どこ？」

と、隣にいた女性が驚いた声を上げる。

彼女は手を頭にあて、綺麗な黒髪を揺らしていた。

選択肢①「話しかける」

あなた「す、すみません、ここ、どこなんでしょうか」

女性「あなた、誰ですか」

あなた「僕は...」

あなた「...」

あなた「あれ...僕の名前..」

あなた「思い出せない...」

女性「あれ...私も...思い出せない...」

ふと全体を見ると、そこには50名ほどの高校生ぐらいの男女が倒れていた。

女性「って、みんなここで倒れてるけど…」

女性「私は…何をして…」

女性「あれ...思い出せない…」

女性「でも、言葉は分かる...」

周囲の混乱が一層深まる。

倒れている人たちも、次第に目を覚まし始め、同じように自分の名前を思い出せない様子だ。

選択肢②「話しかけない」

「おーいたいた」 その時、先輩冒険者が現れる。 彼の存在感は一瞬で周囲の注意を引きつけた。

彼はがっしりとした体格で、身長は190センチを超えている。

年齢は30代前半ぐらいだろうか装備は重厚な鎧で、凄まじいオーラを醸し出していた。

謎の男「今回はこれぐらいか,,,」

謎の男「お前ら、何でここに来たかわかるか？」

謎の男「分からねぇだろう。ここにきて15年になる俺もいまだに分からねぇ」

謎の男「来た時は名前も分からなかった」

謎の男「何も分からないお前たちに教えてやるよ。お前たちにこれから待ってるのは、地獄だ」

謎の男「この世界は、自分達で狩りをして、自分達で稼がなきゃならねぇ。強いやつが生きて、弱いやつが死ぬ世界」

謎の男「まぁ、そんな話をしにお前らを探しに来たわけじゃ～ない」

謎の男「毎年この時期になるとどこからかお前ら見たいなやつがここに発生するんだよ」 謎の男「結論からいうと、才能があるやつは、俺たちと一緒にこい」

すると、彼は右上にある「プロパティ」を指差す。

謎の男「プロパティってゆうのがお前たちの視界の右上にあるだろ」

謎の男「それを開いて最初の画面に見えるのがお前らのプロパティ、つまりステータスだ」

隣の女性「プロパティ」

隣の女性「本当、レベル1,HP30 MP15、それにスキルまで」

謎の男「そうだ、その情報が今のお前たちの状態を示している。レベルやHP、MP、スキルは、生きていく上で非常に重要」

謎の男「まぁ、ステータスを見なくても、ある程度の熟練度までくると、そいつの持ってるオーラで素質や素量を判断することができるようになるんだ」

その後、謎の男は数秒辺りを見渡すと、2名を指さした。

「おい、そこの銀髪と、隅で座ってる金髪の女、俺たちとこい」 すると、ガタイの良い銀髪の男と金髪ロングの女性は無言でジョージの方へ歩いて行った。

「お前たち、名前は？」

「俺はハイトスだ、私はリーナよ」

謎の男「さすがだ、もうプロパティから名前をつけているようだな」

謎の男「俺はジョーラだ、お前たちはスカウトするからついてこい」

するとジョーラだと名乗った謎の男は全体に向けて言葉を放つ。

謎の男「これから、他の先輩冒険者たちもお前らの事を視察に来るだろう。そこでスカウトされれば生き残る確率があるが、スカウトされなければ自分達でパーティーを組むしかない。つまり、何も教えられずに生きなきゃいけない。生き残る確率はぐんと下がるってわけだ」

謎の男「ま、其れでも生き残りたいってやつは北西の冒険者ギルドへいくといい」

謎の男「ハイトス、リーナ、いくぞ。」

画像がフェードアウト

時が経つにつれ、村の広場には次々と先輩冒険者たちが集まってきた。

重厚な鎧を身にまとった男や、長い髪をなびかせた弓を持つ男、杖をもつ軽やかな装束の女性冒険者などが、めぼしい人材に声をかけていた。

だが、俺が話しかけられることはなかった。

一通りの時が経つと、辺りには余りものだけが残っていた。

あなた「くそ、なんで、俺には才能がないのか」

あなた「プロパティ」

スキル一覧を表示

あなた「レベル1,HP15,MP5」

あなた「スキル　無」

あなた「加護「助ける者」?」

あなた「意味が分からない。「助ける者」って誰かを助けるのか？」

隣の女性「ねぇ、君」

いきなり隣の女性「が話しかけてきた」

隣の女性「君、スカウトされなかったの？」

隣の女性「私はさっき、杖を持った女の人にスカウトされたよ」

あなた「あ、あはは笑、僕には才能がないみたいで」

隣の女性「きみ、隣にいたから話しかけたけど良いやつそうだからすぐパーティー見つかるよ笑」隣の女性「私もういくね。じゃあまたどこかで」

あなた「う、うん。頑張って笑」

あなた「はぁ。さっきの女の子どころか回りもみんなどこかへ行ったみたいだし、俺ももうそろそろ動かないとな」

時は流れ、俺は北西に位置する冒険者ギルドへと足を運んだ。

今日はここまで。

周囲を見渡すと、賑やかな雰囲気が漂っている。

人々が集まり、笑い声や話し声が交錯する中、俺はギルドの入口を探し回った。

すると、ギルドと書かれた看板が見つかった。

あなた「ここが、ギルド…だよな」

ギルドの扉を開けると、目の前には屈強な男たちや女たちが酒を酌み交わし、楽しげに談笑している光景が広がっていた。

奥の方には、クエストボードが掲示されており、様々な依頼が書かれているのが見える。

冒険者としての第一歩を踏み出すため、俺は受付に向かった。

あなた「すみません。冒険者になりたいんですが。」

すると、受付嬢が優しい笑顔で答えた。

受付嬢「あのー、冒険者ギルドの登録は1人ではできません。必ず3人以上のメンバーを集めてくださいね」

な、なんだって！そんなことは聞いていないぞ。

周りを見渡しても、他にパーティーを組んでくれる人なんて見当たらない。

いや、今なら同じ境遇の人たちがいるはずだ。

ここでお探しイベント発生、一通り全部探せば次に行けるみたいな

俺はギルドの中を色々と探し回ったが、誰もいない！！！

いや、まだあきらめないぞ！！

トイレにいるはずだ！！

宿屋は！！

レストランなんかも！「お客様はお入りいただけません」「くそが！！」

一番高い塔からみおろせば！「高すぎて誰も見えない」

「何でいないんだよ…」と、心の中で叫びながら、一旦座ることにした。

目の前にいたのは、あの時の女の子だった。彼女も同じように困っている様子だ。

「君、あのときの。」

「え、うん。ギルド登録でパーティー3人以上って言われて、」

「私も、、同じ」

「もしよかったら、組む？」

「え？いいの？」

「私も同じだし、いいよ」

「ありがとう～泣」

「君、名前は？」

「え？そんなの覚えてないよ、君も覚えてないんじゃないの？」

「えー、まだ名前つけてなかったの？ほら、右上のプロパティってところで名前設定できるでしょ。」

「あ、ほんとだ！！！」

「名前『○○』に決定。」

「ありがとう、で？名前何にしたの。」

「『○○』だよ。」

「ありがとう。『○○』。私はレナだよ。」

「よろしくね！」

しかし、あと一人が必要だ。周囲を見渡しながら、次の仲間を探す決意を新たにする。冒険の始まりは、まだまだこれからだ。

次は、一旦ギルドに戻るんだけど、その時に、もめてる男が現れることにする。

なんでだよ！！冒険者にさせろ！！

1人で十分なんだよ！ボケが！！

んで、なんかでかいやつが、

お前、騒がしいな、ここはみんなが使う施設だ、

話を聞いていたがお前ひとりなんだろう、お前みたいなやつと一緒にパーティーになりたいやつなん材内だろうがな、

お前、口を慎めよ

あ？やるきか？

めっちゃバチバチ担って、

バチコリ吹っ飛ばされて、ぼこぼこにされると

んで、そいつが一人でぼこぼこになって椅子に座ってるところに

あんた、だいじょうぶか？

って話しかけにいくみたいな、

んで仲間

そいつが、お風呂を覗きにいったり、バカな発言をするバカキャラに決定

だけど、やるときはやる感じで、後から相棒にするかどうかは未定

んで、ようやく冒険者ギルド登録をするってなって、冒険して、3人で、最初はやってくんだけど、

お金ないなーって時に、主人公が道に迷ったときに、変な女の子が、なんか意味不明なセリフ言って、主人公助ける

そいつが、フリーナって言って、後々の仲間になる。

そんで、何科の時に、お風呂を除きに行こうって言いだしてそれを止める主人公嫌われるその男、そんな中で、

めっちゃ強い敵が町を襲撃

そんなときに、レベルアップしたハイトすとリーリエがエリート集団と一緒にそいつらを一掃

力の差を見せつけられた俺たちは、理由を探った結果、力の泉という所に行って竜の血を飲むことが条件だと言われてそこに行くことにする

んで、その為には、より強い人材、タンクとヒーラーが必要だってことで、

仲間集めをしてから力の泉に行く

んで、力の泉まで行って、皆が竜にやられて木津付いて、ギリギリのところで、フリーナが、ありがとうって言って死ぬ

僕たちは傷だらけの体で、フリーナの遺体を協会に店に行く。

すると協会の主は、君たち、この娘、人間じゃない。フェアリーだ。

フェアリーは希少性が高く、めったに人前にめったに人前に出ないんだが、

この子は、君たちを助けたいと思っていたのかのぉ

フェアリーは感情が無く質素じゃが、とっても優しい種族じゃからのぉ。

皆が大泣きする

この子、救いたいか？

え、、

その言葉に一瞬頭が真っ白になる

すくいたい。

ならば、眷属になるほかない。

眷属？

あぁ、この子の血を飲め。

そうすれば眷属になれる。

この子は生き返る。

ありきたりかなー、

まぁいいか、

フリーナ、お帰り泣

また、やっていこう。

END

その後、眷属使いの冒険者と呼ばれるようになった。